カンボジア プノンペンの奇跡
～日本のＯＤＡ事業の実施に重要な役割を担う地方自治体の活動～

シンガポール事務所

「プノンペンの奇跡」という言葉を聞いたことがありますか。プノンペンの水道水は2004 年５月に「安全な水」として宣言され、蛇口から直接飲める水質が達成されました。さらに、漏水率を 2011 年には 5.85%まで達成しています（タイ・バンコクでは漏水率は 20%以上と聞く）。その驚きから「プノンペンの奇跡」として、その成功が表現されています。アセアンの中で、生活している駐在員の中でも、水道水が直接飲める国は、唯一シンガポールのみと認識している方も多く、この事実はあまり知られていません。

プノンペンで水道事業を行っているプノンペン水道公社（ＰＰＷＳＡ）は、供給する水質の管理や経営面においても世界的にも認められアジアのノーベル賞と呼ばれている「マグサイサイ賞[i]」を受賞しています。この発展には、日本の政府開発援助（ＯＤＡ）による国際協力とその事業を支える日本の地方自治体の長年の支援がありました。

今回機会を得て、国際協力機構プノンペン事務所（ＪＩＣＡプノンペン事務所）及びＰＰＷＳＡを訪問することができましたので、その軌跡と新たな挑戦について報告します。

■上水道事業支援の概要

プノンペンの水道事業の伸展は、内戦終了後の 1993 年からＪＩＣＡの支援によるインフラ整備事業の一つとして始まりました。日本の支援は、プノンペンの水道インフラを整備していく上で、まずマスタープランの作成に取組が始まりました。それを基に日本、アジア開発銀行、世界銀行等のマルチな援助を受け、施設整備が行われてきました。

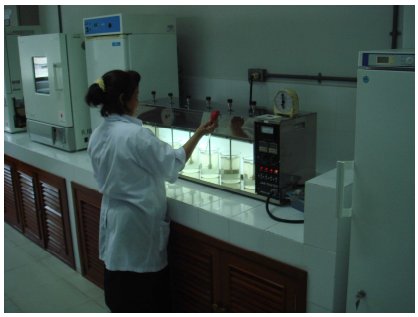
日本のＯＤＡの問題点として施設整備のみで、運営に必要なノウハウの移転がうまくできなかったため、高価な設備が使われずに放置されていることが指摘されたことがありました。プノンペンの場合は、施設維持管理能力を向上させるため、施設整備と並行して、人材育成も行われてきました。

「上水道事業での技術移転で欠かせない存在となっているのが、日本の地方自治体からの支援だった」と、ＪＩＣＡプロジェクトファンデーションアドバイザーの内田氏が話していました。以前、アジア開発銀行を訪問し、日本の地方自治体との連携の可能性について協議したことがあります。その際、民間コンサルとインフラ整備を行っていく難しさについて説明を受けたことが思い出されました。インフ

プノンペン市内にある、プンプレック浄水場

ラ整備事業を成功させるには、ハード面、ソフト面の両面を充実させる必要があります。そのため、いかに充実した人材育成メニューが構成できるかが重要なファクターになっています。

1999 年から北九州市水道局（現、上下水道局）は、ＪＩＣＡに専門家として職員を派遣しマスタープラン作りや、ＰＰＷＳＡの人材育成に全面的な協力を行ってきました。当初は、「数学や理科の基礎知識が定着しておらず、３桁の引き算もままならない人もいた」そうです。若いやる気にあふれる職員の方々が、昼夜を通し積極的に日本の専門家から指導を受けました。その結果、今では、自分の力で水道事業を運営し、漏水の改善や料金回収、さらに水道管の敷設工事を子会社に持つ企業体へと成長しています。



プンプレック浄水場内の水質検査ラボ

■プノンペンの奇跡

内戦終了後、人材不足が顕在化する中、プノンペンの水道事業が成功したポイントは、以下の点をあげることができます。

一つは、ＰＰＷＳＡ総裁の強いリーダーシップ、二つに、ＪＩＣＡのこれまでの経験を生かしたプロジェクト設計、そして日本の地方自治体職員による息の長い人材育成です。

水道料金を支払っている市民の様子

組織のトップが目標を見定めて、若い人材を鼓舞しながら課題に取り組んでいくことは、場所を問わず重要であることがよく理解できます。ＰＰＷＳＡでは公正な人事評価により組織の士気を高めることに成功しているとのことでした。またＪＩＣＡのバンコクでのプロジェクトの経験を生かし、まずプノンペンに適した事業にするため、現実に即したマスタープラン作りに取り組んだそうです。そして、実務レベルでの経験を保有する地方自治体のアドバイスを取り入れながら進められたことが、事業の成功に貢献しているとのことでした。ＰＰＷＳＡからは一挙に水道供給域を拡大したい意向があったようです。しかし、非現実的な目標を追わず、マスタープラン当初計画に忠実にまた、確実に事業を拡大していったことが今日につなげっているとのことでした。北九州市職員が、ＰＰＷＳＡの職員に長年寄り添って、課題を解決してきたことが強い絆を生みました。そして、その強い絆がプロジェクトの成功に大きく貢献していることが、ＰＰＷＳＡの職員の方々の話を伺い、よく分かりました。

当初支援事業を進めるため、職員がプノンペンに長期滞在した際は、生活インフラの不足など大変なことが多かったと聞いています。長期間に亘って地道な努力の積み重ねと、

膝と膝を突き合わせて進めるこの事業の成功にとって、日本の地方自治体の存在はなくてはならないものであったと確信しました。

■新たな挑戦

現在プノンペンでは、ＰＰＷＳＡの経験を地方展開し、カンボジアの主要都市で上水道事業を広げるため、新しいＪＩＣＡ事業が始められています。シェムリアップやシアヌークビルなど人口が多い８都市の上水道事業公社の人材育成をＰＰＷＳＡの職員が行っていく取組です。これによりカンボジア全土への波及効果を狙ってのことだそうです。

上水道運営も軌道に乗り、今後下水道整備も本格化するため、本年度から下水道マスタープランの作成に取り掛かるとのことでした。また、ＰＰＷＳＡは国際協力としてネパールやミャンマーの上水道公社の職員の人材育成にも貢献することも計画されています。日本からプノンペン、プノンペンからカンボジア全土・他アジア諸国と奇跡のバトンをつなげようと新たな挑戦が始まっています。

今回機会をいただきＪＩＣＡ事務所を訪問させていただきました。非常に短い時間でしたが、プノンペンの上水道事業にかける思いは、日本側・カンボジア側双方から感じることができました。機会があれば再度、今後のビジネス展開について調べてみたいと思います。

（参考文献）

「シリーズ第４弾ＪＩＣＡプロジェクト訪問」：http://www.jica.go.jp/cambodia/english/office/others/pdf/visit_04.pdf

（ＪＩＣＡプノンペン事務所での聴取）

（則松所長補佐　北九州市派遣）

[i] フィリピン大統領ラモン・マグサイサイを記念して創設された賞。アジア地域での社会貢献など功績のあった個人や団体に贈られる。